

【講義と演習⑦】

対象者の特性を踏まえた支援のあり方 テーマ② 発達障害者 支援事例

報告者 (山口 久美)

事例タイトル	中学校から不登校、通信制高校を卒業した、周囲とのコミュニケーションのギャップに悩み、人とのかかわりが怖いと感じている女性の日中活動支援		
支援を受けた方の年齢	18歳（知的障害なし、ASDの診断）	支援を受けた方の性別	女性
家族状況	母		
相談の経路	生活支援事業所→（相談支援事業所）→生活介護事業所		
関係した機関・団体	障害者相談支援事業所、生活介護事業所、生活支援事業所（行動援護）		

■ケースの概要

①**発見者** 生活支援事業所所長が発見し、相談支援事業所につなぐ

②**つないだ人** 生活支援事業所所長

③**本人側からの理解や考え** 高校を卒業したので、お金を稼ぐために仕事がしたい。が、いろいろ不安でどうしたらいいかわからない。

④**相談の内容と対応**

- ・生活支援事業所の所長が、以前から知っているケースだった。
- ・自分の好きなこと、興味のあること、気になることに関しては、止まらないくらい話をするが、興味のないことは、全く話さない。
自分の話していることを、相手がどう感じているかがとても気になり、人と会うことになると前日から、何をどう話すか、もし相手が良い反応でなかったときの別の話題などを考えて眠れない。
- ・母親以外と外出できない。
- ・ひとつひとつの行為は自立しているが、その前後が全くできない。（例えば、お風呂に入ることはできるが、次に着るものを選べない、タオルなどの準備もできない。ドライヤーで髪を乾かせない。など）
- ・高校卒業後、家にこもりきりで、携帯ゲームに没頭し昼夜逆転状態、母親はゲーム依存状態だと心配している。
- ・生活支援事業所の行動援護サービスを活用し、母親以外の人と外出し買い物をする練習をしてきた。
- ・高校を卒業すると、お小遣いをもらえなくなるので働きたい。携帯のゲームとギャグマンガが好きなので、携帯料金の支払いと漫画購入のためのお金が必要。

■支援の内容

<step1>

- ・在学中から、卒業後は、生活介護事業所の利用を希望していたので、母親以外と外出する練習をすることと、併せて、同世代の女性（ヘルパー）との会話を楽しめるようになることを目標に、行動援護サービスを活用し始める。家の近くのコンビニまで出かけ、おにぎりや飲み物を買うことができるようになっている。（自分で何を購入するかは決められず、支援者が選んだ2つから一つを決める練習中）

↓

<step2>

- ・生活介護事業所への通所に向けて、特性のアセスメントに基づく支援計画を作成。
通所開始後、毎日通えている。スタッフとのコミュニケーションも良好。
作業能力はとても高く、工程の多い活動でも、一度見れば覚えられる。